鬼女誕生

大原富枝

鬼女誕生

中央公論社

鬼女誕生

©一九七〇 検印廃止

定価 五八〇円

昭和四十五年十二月 九日 印刷
昭和四十五年十二月十九日 発行

著者 大原富枝

発行者 山越 豊

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話 (五六一) 五九二一
振替 東京三四

目

次

一　キャメラマン一色善太と熊のでる渓谷で　7
二　風のような泥坊の侵入と彼女の城砦の自衛法について　35
三　ある危機感への考察A　志麻の場合　59
四　危機感への考察B　直の場合　75

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五　縛られた自動自転車（プロメテウス）のいる劇場で　96
六　人の眉引（まよびき）思ほゆるかも　131
七　鬼女誕生　165

装幀　栃折久美子

鬼女誕生

一　キャメラマン一色善太と熊のでる渓谷で

「こういうもの見てると、私はなんとなく不安になってくるんですよ、これらはみんな車の頭脳と消化器の状態を示しているんでしょ？」

運転席に坐って、ハンドルにかけている両手を、ときどき思いきって大きく一方に切ったり、またするすると元に切り戻したりしながら、蛇のうねったようにカーブの多い峠道をのぼってゆく一色善太を、志麻は横から仰ぐように見ながらいった。

二人の前には、鈍く光るガラスに覆われて計器類が並んでいる。志麻にわかるのは時計と速度計だけであった。その時計はいま六時二十分すぎを示しており、速度はぐっとおとされている。細かい目盛りを刻んだ丸や四角の計器盤の上を、微かな状況の変化によってもたちまち、神経質な虫の触角のように敏感に揺れ動く小さい針があって、志麻の眼にはそれは奇妙な生きものに見える。それらの針は複雑な機械の中枢部に接続されていて、刻々その受持の機械の内

臓の状態をそこに指示しているわけだろう。

一色善太（人々はたいてい彼を悪太と呼ぶが）に対して志麻の持っている曖昧なところがありながら、しかし確固としてもいる敬意のなかには、これらの計器と話し合い、彼等を意のままに動かしてゆくように見える運転という、かつて失敗したことのない歴史をもつ彼の技術に対する思いも含まれている。

車は果てしもなく蛇行する道を喘ぐようにのぼっていて、一色善太の生理も車の喘ぎとともに息づいているのがわかる。

運転者にはその技術の巧拙とは関わりなしにふた通りの人間があるのかも知れない。車とは全く別の、冷徹な精神で、いつでも車を無機質のものと見て指揮し動かしてゆく者と、車にも固有の生理と性格があって、運転者の生理や性格と互いに反映し、呼応したり反撥したりもするものだ、としている人間とである。

一色善太の車は、志麻が街で手をあげたり、駅前の駐車場で列をつくっていて、乗ったりする流しのタクシーとも、また親しい女友達の運転するその愛車ともまったくちがう。

前に書いたふた通りの運転者のどちらにしても、車を運転しているとき人は誰でも不断のその人とはちがう者になる。単にその人が車を意のままに運転するのではなくて、その人間プラス車という、複雑なダブルの人格になるのであろうか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

志麻の若い女友達でもそうであった。そのときの彼女を志麻は嫌いではない。新しい人格の別の友人が生れたようで愉しいくらいである。彼女は車を勝手に動かすのではなく、車と話し合い、車を納得させた上で動かしていた。いつもの彼女のもっている女らしい属性とでもいったいろいろのよけいなもの、煩わしいものが振り落されて単純明快になり、少し男っぽく、無口で、そのせいなのかどうか、奇妙な色気をさえ発散する。かたわらに坐っていて志麻は思わず眩しそうな眼になるのであった。

一色善太の場合は彼女の場合ともちがっていた。彼と車とのあいだには、そんな開放的な、むしろ公正といっていいような話し合い、相談ずくとは異なる理解が通いあっている。もっと仄暗く翳ったものがある。女友達の場合が友情なら一色善太の場合は愛情という方がふさわしい。愛しあっている男と女のあいだよりももっと濃厚でしかしさらりと乾いている。それだけに一層嫉ましいものに見える。

異性のあいだに自然に生れる愛とは微妙に異なる、同性のあいだ、それも男同士のあいだにだけ生れる、液体質ではなく、麻酔性の気体のような感じがなくもない。そして、逆説めくけれども、それは醒めきった、冷たい感触のものなのである。

同性のあいだに生れる愛情は、異性のあいだのそれよりも愛情そのものとしては、動物的、自然発生的ではないその分だけ、より人工的、人間的で、より純粋であるという信条を、志麻

は以前から抱いていた。
男同士のあいだのそれは、女である自分のうかがい知ることのできない堅固さと、緊密な深いつながりがあるのではないだろうか、と考えたりもしている。
別にこれという根拠があるわけでもないのに、一色善太にそのような同性の愛人がいるのではないか、という疑いを、志麻はすでに長いあいだ根づよく抱いている。この疑いは彼の運転する車に同乗しているとき、横からむっつりした彼をじっと観察しているとき、一層確実なものになる。彼の、痩せてはいるが強靱な革砥のような感じのする両腕にしっかりと握られているハンドルや、その脚の軽くかけられているアクセルを通して、彼と車の心臓をつないでいる愛情の流れが見えるようだ。
複雑な内臓の顔である計器の鋭敏な針の振れは、二人のあいだだけに通じる秘密なサインかも知れないではないか。
志麻が話しかけたのは、そんな二者のあいだに割ってはいることであった。志麻は是非ともそうしたかったのである。それがわかっているのか、一色は無視して答えず正面を向いていた。
自分のことを機械音痴とか方向音痴とかいうのは、あまりいい感じのものではない。それは卑下に似ていてそうではなく、一種の甘えのようである。無責任で、不精で無能力なことを、なにか不可抗的な天性にすり替えたり、ときにはその代りに別の何かの能力があることの誇示

に聞える場合さえある。一色の無視が、無言の批判になって、言葉はちがうが結局同じことを自分もいっているのだ、と志麻に思い知らせるのであった。

新緑が出揃って両側から被いかかる峠の道はもう日暮であった。いつ通ってもそれが夏を中心とする前後の季節であるせいか、峠には霧がたちこめている。ほとんど夜道のように危険感が濃くなってくる。すべての車が霧燈をつけていてライトの放射状の帯のなかにだいだい色の煙のような霧が幕になって浮かびあがる。一色が大きくハンドルを切るたびにカーブが現われ、光の帯の中で両側の林がざわめき、先方からも二つの光る目玉をもった怪獣が現われてはすれちがってゆく。ワイパーがゆっくり動いてフロントガラスの粒の霧が扇型に両側へ払われ、片寄せられた霧の雫が雨滴の玉になり、白く光りながらまるで生きもののように走って他の玉と合して更に大きな玉になったり、拒絶しあって分れ分れに背きあって走ったり、その先で別の玉と愉しそうに手をとりあっていたりする。合わさっても背きあっても、結局彼等は一本の紐になって落ちてゆく。

……鬼ひと口の雨の夜に、鬼ひと口の雨の夜に、神鳴り騒ぎ恐ろしき、その夜を思ひ白玉か、なにぞと問ひし人までも、わが身の上になりぬべき、憂き世語りも恥づかしや、憂き世語りも恥づかしや。

――一色と水道橋の能楽堂へいったのは、もうずいぶん前のことだ、と志麻は答えない彼の

横顔を見ながら思った。

まだ頂上には到着しないのに日はまったく暮れてしまった。「スカットさわやかコカ・コーラ」と車体の周りに書き散らしたトラックが、積荷を満載して大きく高い図体を持てあますように、曲り角ごとに大きく左右に傾きながらのぼってゆく。スカット。コカ……。さわやか。コーラ。スカット。コカ・コーラ。一色の車のライトに前の車の車腹の文字が踊るように浮かびでたり消えたりする。スピードを極度におとしているために一層重心がとりにくいらしい。被さるような積荷の高さが、後の車の人間にとってはうっとうしい。

そのトラックは山下で上りにかかるときすでに彼等のすぐ前に位置していた。それまではゆっくり車間をとって小型車がちょろちょろ前を駈けていたが、上りにかかる直前にこのトラックがどこからか現われて、するすると小型車とのあいだにちゃっかり割り込んでしまった。一色の車がもし気の荒い長距離輸送のトラックでもあったら喧嘩になっていただろう。乗用車、トラック、ダンプ、小型車、またトラック、乗用車……。すべての車はこの濃い霧の峠越えでは否応なく一本の数珠につながれてゆく。一つ一つの珠の位置は決定されていて運命のように動かしようがない。追越しも割込みも絶対にできない。九十九折の長い道中、このうっとうしいトラックとの関係は、変更されようがないのである。堪えなければならないこの世の生と同じように……。

ハンドルを握っているときの一色は、それをよく承知しているように、いつも落着いていて従順である。決して苛立ってみたり、若者たちのように役にも立たない舌打をしてみたり、ぶつぶつ悪態をついてみたりはしない。いまのこのときより以上に、忍耐を要する条件のなかで黙々と運転する彼を、志麻は長い時間眺めていたこともある。志麻はそのとき、自分の方が苛立ってくるのを抑えるのに苦労したことを思いだす。

あまりに落着いている彼が憎らしくさえなって、自分もいっしょに乗っており、同じ危険にさらされていることも忘れて、もっと困難な条件がやってくればいいのに、と志麻は思ったりした。彼はそのときも不断とまったく同じだったのだ。乗せている志麻に対していいわけのようなこと、あるいは気をそらさせるようなこともいわない代り、至極涼しい顔をしている。

運命のままに、あるいは神の予言の的中のために、父殺しの罪を犯したり、母や姉妹と姦しあったりするギリシャ悲劇のなかの巨人のように、彼は悠然としている。そんな彼を横から黙って意地悪く眺めているのが、志麻はそのくせ嫌いではないのであった。

総じて彼の傍にいるときは意地悪になるのが志麻は愉しかった。一種気持に張りが生じる。(女が男に対して意地悪になるとき、それはどんな種類にしろ、愛を含んでいる。愛していない相手に対しては女は親切になるのである。)とにかく一つの悦楽であることは事実で、悦楽にしても対抗的な軽い緊張が絶えずあって、この軽い緊張が長く保たれてきていることはなん

にしても悪くはない。それは男と女のあいだを腐敗させるものとは反対のものである。
「何ヵ月ぶりだったかしらね」
前に逢ったのはいつだったろう、と志麻は思う。すぐには思いだせないほど、途切れていては逢うことが積み重ねられてきた歳月の長さが、月明の夜の一本の仄白い途のように光って二人の後につづいている。
「そろそろ一年が近いかも知れない。あんたが、マリーナ・ツヴェターエワについてばかりしゃべっていたころだ。相当悩まされたものだった……」
「へえ、そう。ツヴェターエワ。思いだしたわ、そう、もう一年近くなるわね」
——笑ってはならぬときに笑うのが好きだった、とエレンブルグが回想している彼女の、自分自身についていった言葉を、志麻はまだおぼえていた。
「……私は自分の人生のあらゆるものを愛した。出会いではなく別れで、融和ではなく断絶で、愛し通した。……」
一色にそういわれてみると、あのころ、昼も夜も忘れられなく切なかった彼女の苦痛が、いまもある程度自分の身体に染みて残っているのが志麻によみがえってくる。
革命当時のモスクワで、昼もランプを燈さなければならない屋根うら部屋で、幕のように濃くたちこめた煙草の煙のなかで、タールのようにどす黒いコーヒーを飲みながら、詩をかいて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com